

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

生命は

いつ始まる？

生命は受胎、すなわち受精に始まる。これは誰もが知っている、ごく当たり前のことだ。遠い昔、私の祖父が医学を初めて学んだ時、同じことを教わったという。私自身が医学校に入

学したときも、同じ話しを聞かされた。だが、一九七六年に私の長女が医学校に入った時は、生命の始まりはいつかよくわからな

ないが、精子と卵子が結合することで46になり、受精卵は通常の染色体数に達する。この結合を受胎もしくは受精と呼ぶ。

受胎の成立によって新たな生命が誕生する。最初はほんの小さな細胞1個ではあるが、生体学的には、人間としての機能が完全にそなわっている。この1個が2、4、8、16、と分裂を重ね、思春期までには3千万個にも及ぶ。だが、これらの細胞ひとつひとつには、最初の一個と全く同量の情報量が含まれている。つまり、我々人間は一細胞の時からまぎれもなく人間であり、男か女かも決定されているのだ。46の染色体を持つという

90年近くも生きていく。ここまで説明すれば、生命は受胎に始まり人間は一細胞のときから人間だということが、生体学的に正しいとわかるだろう。今よりずっと小さく、はるかに未熟だったが、単細胞の頃からあなたはあなた以外の何物でもなかったのだ。その頃から今日まで、栄養と酸素を除いては、細胞には何ひとつ加えられていない。人間の生命は、受胎の瞬間から既に始まっている。この事実を否定する人がいるとしたら、まだ知らされていないのか、わざと否認しているとしたら考えられない。

進歩の道を歩み続ける。母体内で10カ月過ごした後は、外の世界へ飛び出して90年近くも生きていく。ここまで説明すれば、生命は受胎に始まり人間は一細胞のときから人間だということが、生体学的に正しいとわかるだろう。今よりずっと小さく、はるかに未熟だったが、単細胞の頃からあなたはあなた以外の何物でもなかったのだ。その頃から今日まで、栄養と酸素を除いては、細胞には何ひとつ加えられていない。人間の生命は、受胎の瞬間から既に始まっている。この事実を否定する人がいるとしたら、まだ知らされていないのか、わざと否認しているとしたら考えられない。

J・C・ウィルキー

医学博士

キリストの 平和のための道具

「主よ、どうぞあなたの平和のために私を役立たせてください。」と祈り求めたのはアッシジの聖フランシスコでした。彼の心からの願いは、憎しみのある所に愛を広め、傷のある所に許しをもたらす事でした。又、彼は疑いと失望と悲しみに満ちたこの世の中にキリストにある信仰と希望と喜びを広めようといいました。暗闇の中にある者達にキリストの光をもたらそうと、熱心に働いたのです。

この祈りは私には一つの挑戦となりました。フランシスコは私が従おうと求めていた一つの模範を示してくれたのです。彼はキリストを知り、その愛と許しを体験する事によってのみたらされる永遠の平和を人々に伝えたい、

と言う熱い思いに満たされていきました。人々は表面的なものではなく、真実の平和に飢え渴いているのです。

中絶を行う病院や診療所ほど平和を必要としている場所は他にないと私は思います。中絶は傷害や疑い、失望、暗黒そして多くの悲しみに満ち満ちています。胎児にも母親にも全く平和はありません。

私達は愛を広めるためにクリスチャンと呼ばれています。この愛は必ずしも快い感情で特徴づけられていたとは限りません。それは深みと確信を持つ愛でなければなりません。中絶の場合、愛とは「真実」に等しいものです。私達は真実を語る事で女性への愛を示さなければなりません。

多くの人々は世界に平和をもたらしたいと望んでいます。彼らは他の国々のための平和を築こうと必

死になっていきます。こういう人々は自分の国の胎児には何の平和もないのに、「平和を。平和を。」と他の国々のために言うのです。

私達は自分の町、隣、近所で愛と正義を求め、叫んでいる声に耳を傾けなければなりません。と言うのは、もし私達が自国の胎児に向けられた戦いを止めようとしないのに、どうして遠く離れた国の平和を求め、求める事が出来るでしょうかと言う問いかけになるからです。

妊婦は毎日のように中絶産業にだまされ、混乱させられています。彼女達は平和を求めて飢え、深い愛に渴いているのです。中絶する医者やそれを助ける者は中絶と言う悪魔の暗闇に封じ込められているのです。彼女達は、キリストのみからもたらされる平和を本当に必要としています。

「主よ、あなたの平和の

ために私を役立たせて下さい。」この祈りがあなたに挑戦と励ましを与え、胎児と平和を失った女性達のためにキリストの平和を与える者へとあなたが変えられるようにお祈り致します。もし、あなたが伝えなければ、神の平和は彼女らにもたらされません。キリストの平和があなたの、心に留まり、そして、あなたの心から溢れ出て、中絶と言う暗闇の中で、もがき苦しむ人々の心に注がれますように。

ノボトニー・ジェリー

Omni

中絶に「ノー」と 言えますか

あなた方は信念について尋ねられたとき、遅かれ早かれ、次のようなある特定の質問にぶつからざるを得ない事でしょう。それは「では中絶についてどうお考えですか」という問いかけです。ここに実在した人物の二つの短い話しをご紹介します。二つとも共通して付けられているタイトルは、あなたが消し去ろうとしている人物は誰なのかという事に気をつけなさい」である。

私がお話しした看護婦であつたとする。ある日、ある女性が私の勤務する診療所にやってきて、中絶したいので先生を紹介して下さいと頼んだとします。聞いてみると、彼女は結核患者で、夫はと言うと大酒飲みの上、梅毒にかかつていて、その精神も徐々におかされつつあるという。彼らの間に生まれた子供のうち、最初の子は盲人で、2番目はすでに亡くなつており、3番目は聾啞者、そして4番目も母親と同じく結核患者である。これらの事を聞いて、私はすぐに決断を下した。考えるまでもない事だ。彼女には確かに中絶が必要だ。そして私は彼女のために中絶の手続きをとり、そして、殺してしまつた。ルドウィック・バン・ベートルベンを！・・・これが彼の運命だつたとは！

もう一つの話はもう少し大胆にやってみよう。私は妊娠約10週目の若い妊婦の事を聞かされたとしましょう。彼女と婚約中の若者はこの妊娠を知つて、困つた事になつたと思ひ、彼女との婚約を取りやめなければいけないかもしれないと考えられています。もしもこの子が生まれた

ら、貧困の中育たねばならない。世間の人からうとまれ、必要とされない運命である。結果として、ひどく鞭うたれ、苦しみ、十字架の上で苦悶の末死んでしまっただろう。

もしあなた方がこのような時代に生き、このような話しを聞いたら、どうお答になったでしょうか。この中絶に「ノー」と言ってしまうえば、この時代の社会状態から考えると、あなたは矛盾した人間となる。しかし、もし「イエス」と言えばその時はあなたはこの人の死に責任があるかもしれない。イエス・キリストの死に！

この二人の母親は不安で、苦しみ嘆いていた事は本当かもしれないが、一人ともわが子の死を選ぶ事など思いもよらなかった。偉大な二人の母親に我々は感謝の意を贈るべきだ。

ハンガリーからの手紙

この手紙を読んで、以前、共産主義国であった国の事情を知ると、あなたは驚くであろう。そこでは、一九五〇年以來の百万件の中絶が行われてきた。現在でも、そのような小さな国で1日300件の中絶が行われている。

残念なことなのだが、私も15年前に婦人科医になってから多くの中絶を手掛けてきた。法によって私はそうせざるを得なかったのである。

当時、私の良心は眠っていた。私は神やキリスト教については考えなかった。子供時代に秘かに宗教教育を受けた記憶を忘れたかのようだった。私は無神論者のように生活していた。そして数年前、私は共産党に入党するように言われた。その時、私は自分

自身の人生について考え、一つの決心をしなければならなかった。

私は共産党を拒み、信仰を取り戻した。しかし中絶を拒絶するほどの勇氣はなかった。私は、小さな診療所に追放され、再び手術室や分娩室に入れなくなること恐れていた。

現在、政治情勢が変化し、私は1ヶ月前、病院の教授(彼は共産主義者である)に自分の良心と信仰を理由に中絶を行わなくてもよい許可を申請した。すると予測していた通り、彼は即座に私を解雇した。その代わり、私は夜勤と個人的に私を依頼してきた女性の出産に立ち合う許可を求めたが、彼は怒って拒絶した。

翌日、彼は全ての医者と呼ばひ、私の要求を受け入れるかどうか投票を行った。彼らは何と言ったろうか。イエスカノーか。私はその場所に参加しなかったが

結果は分かっていた。しかし、3人のみが私に反対の票を投じ、そのうち1人は教授であった。彼の意思とは全く正反対の結果が出たのであった。

長年にわたる共産主義の絶望の後、私はようやく平和な気持ちになることができた。現在私が最も実行したいことは、中絶の誘惑と戦っている貧しい女性に救いの手を差し伸べることである。私の使命は、生まれていない赤ん坊のために戦うことである。道徳的に未だ十分整備されていない環境のもとは、穏やかで魅力的でかつ忍耐強い方法を見つけたことに努力しなければならぬ。

(HLI News 1992)

「奇形児ですよ」と言われて

生まれてくる子供に肉体的な欠陥があると分かっている場合、医師は中絶を強くすすめてかまわないことになっている。超音波検査により、妊娠初期の段階でも医師はお腹の中の子供に肉体的あるいは精神的な異常があるかどうかを見定めることができる。心臓病やダウン症など異常はいろいろ考えられるが、何らかの異常が見つかった場合、両親は子供を中絶するべきかどうかという苦しい悩みに直面することになる。母親はこのままの状態を続けて、少しでも子供の異常をよくするように努力するだろうが、父親はこれから受けねばならなくなるだろう手術の費用のことを考えると出産して育てる事はとても無理だと思っただ

ろつ。父親にしてみればその子供を中絶してもう一度やり直す方がずっと簡単に思えるからだ。

奇形児を生むという恥ずかしさが、夫婦に中絶を決心させる重要な要素になってくる。今の社会は、すべてに対して、つまり、

これから生まれてくる子供に対してさえ、完全さが求められる状況になってしまった。完全でないもので満足してはいけないとまでいわれるようになった。だからお腹の中にいる子供が完全でないという理由で中絶をしても誰からもとがめられないわけである。それどころか、むしろそうすることが当然とさえ思われている。

6年間子供作りにはげんできた夫婦がいる。そして、妻は薬の力を借りてやっと妊娠に成功した。しかし、妊娠16週目に子供がダウン症であることを知った。医師は中絶するこ

とをすすめたが、母親は迷った。父親は、障害を

持った子供の世話をし続けなければならぬ長い年月のこと、家族の生活がその子供のためにどれだけ制約されることになるのかということ、頭が

「生まれてこなくてもすむ奇形児のために、自分たちの結婚生活が犠牲になるのは耐えられないと思

いきました。又、異常のある胎児をこれ以上成長させないようにしてやるのが親切なことだとも思ったのです。」と父親は語りました。

特にそうである。

ここに、もう一人の女性の体験談があります。彼女の長女は未熟児で、生まれた時から目が見えなかった。長男も未熟児で骨の病

気に苦しめられていました。それで、3人目を授かった時、彼女は医師に中絶してくるよう頼みました。しかし、その頃は

まだ中絶が合法化されていなかったため、医師は彼女の頼みを拒否しました。彼女はそれ以上中絶することを強行しようとはせず、予定日より1週間早く健康な男の子を産む事が出来たのです。彼女は健康で元気な子供を中絶しな

かったことを心から神に感謝していると話してくれました。

(HWRFA)

中絶に対する

十代の反応

アメリカで実施された調査によると、研究に参加した大多数のティーンエイジャーは、女性が妊娠中絶を受けることに反対しています。

調査員の「妊娠中絶」と言う言葉を聞いて最初に思い浮かべるのは何ですか」という問に対して、彼らの一番多かった答は、「殺人」、「赤ちゃんを殺す事」、そして「死」などでした。ある若者は、「妊娠中絶とは、女性が子供をいらないときに子供を殺そうと決心する事だと思つ」と言っていました。

ティーンエイジャーの多くが、妊娠中絶とは妊娠したことを他の人に知られたくない若い女性が、手つとり早く済ませてしまふことだと述べています。一般に、研究に参加し

た女性は中絶を受ける妊娠女性に対して、強くその動機を伺う傾向にあります。これらの女性は、母親となる女性の状況のいかんにかかわらず、まだ産まれていない赤ちゃんには罪がない、と主張します。男性の多くも、産まれてきた子供は父親となった男性に預けて育ててもらえばいい、と提案しました。また、「どういふ行動をとるにしても、殺すのよりましだ」という人もいました。これらティーンエイジャーは圧倒的に妊娠中絶は悪い、という認識を持っていました。彼らには、胎児はまだ産まれていない子供が、人であるというはつきりした認識があります。

興味深いことに20年前では、法的妊娠中絶の正当化論争の一つに胎児は人ではない、というのがありました。「この論争は、中絶されるのは人ではないの

だから、生命は中絶問題の中に取り込まれなかったのだと説明した。だから、「殺し」や「殺人」の要素はないのである、ということでした。研究に参加したティーンエイジャー達は、妊娠中絶中に赤ちゃんが殺されたということをしつかりと認識していません。科学的、医学的研究は、人間の生命は受精の瞬間に誕生することを明らかにしています。これに対して社会は、妊娠中絶の新しい正當化、「子供の権利より母親の権利の重視」で対応しています。

このような考えの問題は、誰かの権利、つまり子供の権利が奪われている、というところにあります。もし妊娠中絶が間違っているのなら、それは人を殺しているからです。私達はこの事を認識するのであれば、子供達のいきる権利のために取り組む必要があります。中絶を選択する

と、生まれてこようとしている赤ちゃんに選択や生きている機会を与えることができないのですから。

《事務所だより》

皇太子妃内定という明るいニュースで開けた1993年の新春、皆様にはいかがお迎えになられた事でしょうか。お伺い申し上げます。

今、日本生命尊重推進協議会では胎児の人権宣言の署名を集めております。この協議会は国連により承認された非政府機関である国際生命尊重連盟の日本支部です。私たちの日本プロ・ライフ・ムーブメントもこの協議会に所属しております。この署名運動の目的は胎児の人権について賛成してくれる人、生命尊重について思いを同じにする人を集めての仲間づくり、そして、外への働きかけとしてマスコミに訴え、法律改正などの機運を盛り上げていきたいと考えております。この趣旨に賛同して頂ける方

でしたら、どなたでも結構です。お願いして頂きたく今回のニュースと共に署名簿を同封させて頂きました。皆様の輪の中でこの用紙をお返し下さり、4月頃までにこちらの方に送り返して下さいますようにどうかよろしくお願い申し上げます。

新しい年も今まで以上によろしくお願い致します。皆様のご健康とご活躍を心からお祈りして…

日本プロ・ライフ・
ムーブメント